

平成29年度 第4回研修会

平成29年12月21日（木） 於：大磯町郷土資料館・旧吉田邸 参加者31名

## 「リニューアルした大磯町郷土資料館と再建された 旧吉田茂邸の見学」に参加して

山口蓬春記念館 岡田 修子

### はじめに

大磯町郷土資料館は、平成28年11月のリニューアルオープンから約1年を迎えていた。本研修では、常設展示を一新したりリニューアルの概要や来館者の反応、実感したことなどについて大磯町郷土資料館長・國見徹氏よりお話を伺った。また、同館別館である旧吉田茂邸が再建され、平成29年4月に公開されたことから、再建に至るまでの経緯とともに内部を実際に見学しながら解説を伺った。ここでは、本研修の内容をご報告する。

### 大磯町郷土資料館について

郷土資料館は、相模灘の海と高麗山・鷹取山をはじめとする丘陵によって様々な文化が育まれてきた大磯と、その周辺地域を含む豊かな風土の拡がりを「湘南の丘陵と海」というテーマとして捉え、昭和63年10月に開館している。しかし、開館から28年間の博物館活動の中で、常設展示の小規模な展示替えは継続的に行ってきたものの、大型展示資料などの更新がされないことから、展示内容が変わっていないという印象があり、展示リニューアルの必要性が説かれていたという。そのような状況もあり、旧吉田茂邸の再建事業が進む中で、郷土資料館も旧吉田茂邸と同様の県立大磯城山公園内の施設として整備計画が決定し、平成27、28年度の2ヶ年で常設展示のリニューアル工事が行われた。

### 展示リニューアルの内容

常設展示室に展示していた御船祭の舟山車や竪穴住居の復元模型などの大型展示資料を撤去し、「別荘地 大磯」にかかわる近現代史に重点を置いた展示内容に変更したという。また、エントランスホールには、京都の安井奎工務店に保存されていた古材を活用して、この地にあった三井財閥本家別荘・城山荘の広間吹抜上部を再現するこ

とで、その趣を感じられるような空間にした。また、常設展示の導入にあたる展示ホールも、更新前の大磯と周辺地域を詠んだ和歌・散文の紹介を活かしながら、大磯町内で出土した縄文土器を併設し、「大磯の風土とかたち」というタイトルで、太古の造形と詩歌文学の美を感じられるような構成となった。近現代史に重点を置いているということだが、常設展示室には、考古、歴史、民俗、自然分野の28年間の収集資料がテーマ毎に展開され、郷土資料館の専門分野がバランスよく紹介されている。

更に、中庭は多くの要望があった飲食可能な休憩スペースとし、回廊は常設展示のエピローグとして「湘南の丘陵と海を訪ねて」をテーマに様々な展示活動を行えるようにしている。

今回の展示リニューアルでは、常設展示室だけではなく、エントランスホール、展示ホール、廻廊、中庭も含めて、展示資料を更新し、幅広く活用できるような整備が行われている。

### 旧吉田茂邸について

戦後、内閣総理大臣を務めた吉田茂は、昭和19年頃から亡くなる昭和42年までをこの邸宅で過ごしている。もとは明治17年に吉田茂の養父・吉田健三が土地を購入し、別荘を建てたのが始まりとなる。養父亡きあと邸宅を引き継いだ吉田茂は、多くの建築家に設計を依頼したが、納得のいく設計に巡り会うことができず、最終的に近代数寄屋建築で有名な吉田五十八の設計でやっと満足したという。邸宅は、昭和36年以降、五十八によって全4期にわたる増改築が行われ、その範囲は居間、寝室、玄関廻り、温室、食堂におよんだという。また、日本庭園は、世界的作庭家・中島健が設計し、本邸周辺部分は、日本庭園研究家・久恒秀治によって造園された。

しかし、平成21年に本邸は焼失、復原された現在の施設は、昭和22年頃に建てられた応接間

棟および五十八が設計した新館をメインに再建されている。

### 旧吉田茂邸再建の経緯

旧吉田茂邸は、吉田茂の没後、西武鉄道株式会社へ売却され、大磯プリンスホテルの別館として利用されていた。しかし、平成16年頃より地元を中心に旧吉田茂邸の保存の機運が高まり、県や大磯町により近代政治史の歴史文化遺産として保立大磯城山公園と一体化した県立都市公園」として、県が整備することとなった。平成21年3月、旧吉田茂邸は、火災で焼失してしまっが、消失を免れた日本庭園や歴史的資源（兜門・七賢堂など）および大磯丘陵に連なる貴重な緑地を保存活用するため、同公園の拡大区域とすることが再確認された。その後、「旧吉田茂邸地区」として県が公園整備を行い、旧吉田茂邸は大磯町が郷土資料館別館として再建し、平成29年4月1日より一般公開されることとなった。

### おわりに

私が所属する山口蓬春記念館も郷土資料館と同様に開館から30年近くを迎えようとしている。当館は、もともと個人の邸宅を改築し、美術館として公開しているため、これまでも木造部分などの老朽化に伴い、定期的な修繕等は行われていた。木造建築の良さを活かすが故に、展示スペースが狭隘であるなど施設面での課題もあったが、平成25年度に展示室2室を増設し、以後、別館の建て替え（平成26年度）、園路の整備（平成27年度）、画室の補正工事（平成28年度）など徐々にハード面のリニューアル工事を行ってきた。郷土資料館での説明や見学では、施設の規模や環境こそ異な

るものの、リピーターを増やしながら活気ある博物館活動を展開していくには、その館で働き、誰よりもその館を知っている私たちが、その魅力を来館者の皆様に伝える工夫や努力を継続的に行っていくことが大切であると改めて実感した。

また、当館は、旧吉田茂邸同様に吉田五十八が増改築をした建物であり、建築関係者の来館も多い。再建された旧吉田茂邸での見学は、五十八建築を知る上で大変貴重な体験となった。

大磯町では、国と地方公共団体との連携の下、「明治150年」関連施策として、歴史的遺産である旧伊藤博文邸（滄浪閣）等を中心とする建物群及び緑地の保存・活用を図るために「明治記念大磯邸園」の整備が進められている。今後、県立大磯城山公園とともに大磯町そのものが「別荘地大磯」を体現するパノラマ的な展示になるともいえるのではないかと。県では、湘南地域一帯の歴史的建造物を活用しようという「湘南邸園文化祭」などの試みも続けられている。各施設が自らの特性を活かしながら、地域との連携を深めていくことが、新たな発見を促し、更なる魅力を創出する可能性へと繋がっていくように思う。

最後に、本研修を企画された神奈川県博物館協会幹事・事務局の皆様ならびに大磯町郷土資料館・旧吉田茂邸の皆様にご心より感謝申し上げます。



図1 研修の様子



図2 旧吉田邸

平成29年度 第5回研修会（シンポジウム）

平成30年2月10日（土） 於：川崎市市民ミュージアム 参加者59名

## 「引き継ぎ」と「高齢化」

～シンポジウム「博物館のまわり：ボランティアの活躍」に参加して～

観音崎自然博物館 佐野 真吾

2018年2月10日、川崎市市民ミュージアムでおこなわれたシンポジウムに参加させていただきました。テーマが「ボランティアの活躍」ということで、県内の博物館がどのようにボランティアの方々と活動しているのか興味がありました。そのため、平塚市博物館さんと相模原市博物館さんの報告は大変勉強になりました。ディスカッションタイムでは、ボランティアの引き継ぎと高齢化についての話題があがりました。そして、多くの博物館が抱える課題なのだと認識しました。引き継ぎについては、基調講演で林公義先生がおっしゃった「無理に引き継ぎをするのではなく、その時いた人たちが博物館のカラーを作っていくものなのではないか」というお話が大変印象に残りました。以前、観音崎自然博物館のボランティアの方にも「引き継ぎも大事だけど、作業ばかりだとつまらないよね」ということを言われたことがあります。何か自身でやりたいことを求めて来ている人にとって、ただ引き継いだことをやるというのは継続しない一つの理由なのではないかと感じました。

次に高齢化についてですが、観音崎自然博物館でも定年退職された方が多くボランティアとして活動されています。経験・技術ともに豊富な方が多く、当館主催の観察会や体験学習、展示作業等の活動において無くてはならない存在です。しかし、その中に新しく若者が入って続くかという点と難しく、これまでも、ほとんど定着しなかったそうです。ボランティアとして来てくださる方には、「やりたいことがあります、それを求めて来てくださる方」と「具体的にやりたいことはないが、何か役に立てることがあれば良いと思い来てくださる方」の2パターンがあると思います。前者の場合、博物館の趣旨と個人の目的が一致すれば解決されることもあると思いますが、後者の場合、今回のディスカッションで平塚市博物館のボランティアの方がおっしゃっていた通り、学芸員やボランティア間の人とのつながりが重要になってくるのかもしれませんが、しかし、若者の

場合、特にボランティア間において、同世代の人数が少ないこともあり、深いつながりができる前に続かなくなってしまうことが多いのではないのでしょうか。そこで、観音崎自然博物館では、実験的ではありますが、昨年夏と冬に1回ずつ県東部を中心に自然に関する仕事や活動をしている10代後半から30代くらいの若者を中心に懇親会をおこないました。参加者の中には、すでに自然に関する仕事や活動をされている人、これからやりたいと思っている人、少しでも興味がある人など様々な人が集まりました。博物館に貢献するボランティアとは趣旨の異なる集いですが、自然に興味のある若者が集まれる拠点として博物館が機能していけば良いと思っています。今後は、それぞれの活動報告や研究報告、情報交換・収集の場としての意味合いを強めていきたいと考えています。また、当館では、もう一つ「ジュニア生物調査隊」という小学生対象の1年間を通した講座を新たに企画することにしました。当講座は、「自然に関する興味・関心を子どもたちに持ってもらいたい」というものからもう少しハードルを上げたもので、生き物に関する活動家や専門家、いわゆる「生き物屋」を育成し、後に、共に博物館や地域の自然を支える仲間になってほしいという願いを込めて企画させていただきました。私は個人的に、子どもの頃から地元の河川でボランティアをやってきたのですが、その中で私が大学生の頃に出会った子どもたちが、現在は高校生・大学生となり一緒に調査や保全活動をする仲間になりました。その経験から、観音崎自然博物館でも将来一緒に活動する仲間をつくっていききたいと思いました。「ジュニア生物調査隊」は、4月からスタートする予定です。

今回、初めて参加させていただきましたが、他館の様子や別分野の博物館・資料館の学芸員さんから話を伺うことができ大変勉強になりました。今回の研修・情報交換会を企画してくださった皆様に感謝申し上げます。

平成29年度 第5回研修会（シンポジウム）  
平成30年2月10日（土） 於：川崎市市民ミュージアム 参加者59名

## 「博物館のまわり：ボランティアの活躍」に参加して

神奈川県立生命の星・地球博物館 田中 徳久

平成30年2月10日（土）、川崎市市民ミュージアムにおいて、平成29年度神奈川県博物館協会シンポジウム『知っておきたい博物館の話「博物館のまわり：ボランティアの活躍」』が開催されました。本稿では、若干の感想や報告者なりの考えを交えつつ、研修会の参加記として、報告させていただきます。ただ、ディスカッションについて、聴いていて自分なりの思うことなどはメモしてはあったのですが、肝心の質問者やその内容、登壇者の回答が記録から漏れていました。申し訳ありません。

### 基調講演「博物館とボランティア：様々なミュージアムから見えること」（元横須賀市自然・人文博物館館長 林 公義 氏）

最初に、基調講演として、元横須賀市自然・人文博物館館長の林氏から、標記タイトルのもと、博物館の機能と役割から海外における博物館専門職員の名称など、博物館学的な基礎知識から始まり、ボランティアの語源から定義、育成の意義まで、海外の博物館におけるボランティア活動の事例まで交え、ご講演いただきました。

植物園のトイレにそっと飾られる草花が、じつはボランティアの自主的な活動として交換されていたというエピソードなどは、昨今の博物館におけるボランティア活動とは異なり、一時期の「ボランティア活動」＝「奉仕活動」的な側面が意識される中で（参加者が感じたことで演者の意図とは異なるかもしれませんが）、興味深い話題でした。また、博物館のボランティアは、無償でありながら「より知的な代償」を求めるもので、「館職員の不足を充当する」ものとして、「好意に甘える態度」をとることは許されない、との指摘など、自分にも覚えがあり、考えさせられました。自分自身、「館職員の不足を充当する」ものではないように常に気をつけてはいるつもりですが、「好意に甘える態度」を取っていないとは言えず、反省しきりです。

### 報告1「平塚市博物館のまわり」（平塚市博物館）

林氏の基調講演の後、休憩をはさみ、平塚市博物館学芸担当の藤井大地氏、天体観察会の永井和男氏に、分野ごとに活動する年間会員性のワーキンググループ、特に天体観察会の活動について、ご報告いただきました。

平塚市博物館のワーキンググループは、さまざまな分野、テーマで活動するグループがあり、これまでも博物館の展示や普及活動などで中心的な役割を担って来たそうです。同館は、博物館→来館者・市民の方向だけでなく、市民→博物館の方向、活動の主体に市民を置いている地域博物館であり、その理念の出発点には、同館で長く学芸員として勤められ、館長もされた浜口哲一氏の哲学が流れているように感じました。天体観察会の活動事例では、さまざまな行事などにボランティアとして協力する活動と、天体観察会自体の本来的な活動があることによる「二足の草鞋」的な状況における苦勞が伺えました。

また、博物館活動を中心として、入門的行事への参加をきっかけに、高度化し、会員制行事への参加、その成果としての展示・普及活動への協力、さらなる活動の拡大の結果として、入門的行事へフィードバックするサイクルなども興味深い話題でした。さらに、素晴らしく開かれた自由な「場」である平塚市博物館への感謝については、常日頃からの博物館とワーキンググループの関係性が伺え、羨ましくありました（とは言え、私の勤務館のボランティアの皆さんとの関係性に不満があるわけではありません。念のため）。

### 報告2「ボランティアさんとの協働企画・運営による企画展紹介」（相模原市立博物館）

続いて、相模原市立博物館学芸員の木村弘樹氏、市民学芸員の畠山義道氏に、同館のボランティア組織、市民学芸員、市民学芸員との共同企画・運営による「学習資料展」について、ご報告いただきました。

相模原市立博物館のボランティア組織で興味深

かったのは、ボランティアグループ間での情報交換などを目的とした「ボランティア連絡調整会議」が2ヶ月に1度開催される点です。私の勤務館でのボランティアは、グループ化されておらず、分野ごとの担当学芸員との協働による活動が主体ですので、これまで特に考えたことがありませんでした。ですが、分野間の情報交換の場があることが、ボランティアの皆さんのモチベーションの向上などに有効かもしれないと感じました(情報交換=学芸員への「ぐち」大会になる可能性も否定できませんが)。今回、報告いただいた「学習指導展」は、毎年開催される展示であり、長期間にわたる準備や会期中に実施される関連イベントの運営などの苦勞に加え、継続性についての課題がある一方、継続することで高評価が生まれ、それがボランティア活動の継続の一助ともなる良い流れが出来ていると思いました。ただし、後述のように、高齢化、固定化については、どこでも同じような課題を持っているようです。

#### ディスカッション「博物館とボランティア：ここで思うこと」

再度の休憩の後、プログラムの最後、ディスカッション「博物館とボランティア：ここで思うこと」が行われました。司会は横須賀市自然・人文博物館学芸員の内船俊樹氏と神奈川県立歴史博物館学芸員の千葉 毅氏で、基調講演、報告の演者の方々が登壇し、演者のみなさんの講演、報告の補足に続き、会場からの質疑・意見を受けつけました。

会場からは、発言者の活動事例の紹介のような内容から、活動における課題など、いくつかの発言がありました。私が気になったのは、やはり、昨今のボランティアに関する議論の中で課題として必ず上がる「高齢化」の問題です。私も、ボランティア活動などの事例を紹介した際に、必ずと言って良いほど質問を受け、その解決方法は見出していませんが、ディスカッションの中で、有意義な意見をいただきました。少し意識となり、また私の思い込みも含まれますが、それは、「高齢化」を問題として「若返り」の方策を探すのではなく、「高齢化」は「高齢化」として「旨く生かし」、持続的に活動する方向性を探る、というものです。もちろん、人間は1年には1歳ずつ必ず年齢を重ねますので、やはり高齢化し、今にして

思えば、「何も解決になっていない」ようにも思えるのですが、少し気が楽になったような感じがしました。

今回の講演、報告、ディスカッションを聞いていて、当生命の星・地球博物館の開館直後、ボランティアや友の会の立ち上げを担当した当時を思い出しました。現在は業務的にはその担当ではありませんが、ボランティアの皆さんの「好意に甘える」ことなく、今後ともに末長く博物館活動を進めていければ、と思いを新たにしました。

最後に、今回のシンポジウムのタイトル、「博物館のまわり」ですが…。昨今の博物館のボランティアを巡る現状では、各博物館によるボランティアの位置づけや関わり方によっても異なりますが、「まわり」と言うよりも、しっかり「中心」を担っているのではないか、ということ付記して、参加記を終わりたいと思います。

また、シンポジウム終了後、恒例の情報交換会が開催されました。他の研究会の終了後にも開かれる情報交換会ですが、私は、研修やシンポジウム本体より、こちらを楽しみにしている面もあります(不謹慎で申し訳ありません)。ですが、普段は接することのない他の博物館の方々とお話する機会は非常に貴重だと思っています。ひとつ残念なのは、ほぼ毎回飲み過ぎてしまい、貴重な話の大部分は忘れてしまうことですが…。みなさんも、研修会、シンポジウムにご参加の折は、ぜひ情報交換会にもご参加ください。

文末になり恐縮ですが、本シンポジウムを企画・運営された協会幹事の皆様、会場となった川崎市市民ミュージアムの職員の皆様、そして貴重なご講演、報告をいただいた演者の皆様に深く感謝いたします。また、本シンポジウムの参加記とは話題が少しずれますが、長く協会の事務局員を勤められ、平成30年12月で退かれた小堀信夫氏には、私が協会幹事を務めていた頃よりたいへんお世話になりました。感謝の意を表するとともに、長年の苦勞を労りたいと思います。お疲れ様でした。

平成30年度 第1回研修会  
平成30年5月18日（金） 於：神奈川県立歴史博物館 参加者79名

## 「再開館に迫る！神奈川県立歴史博物館 特別展&施設見学」 参加記

小田原市郷土文化館 田中 里奈

神奈川県立歴史博物館は、平成28年5月末より空調機器改修のため休館に入り、平成30年4月28日に再開館した。平成30年度神奈川県博物館協会第1回研修会は、この再開館した県立歴史博物館で実施され、設備改修及び再開館記念特別展についての講演ののち、館内見学を行った。本研修会の様子について感想を交えながら記したいと思います。なお、勝手ながら文章中では神奈川県立歴史博物館を県博と表記させていただくこととする。

### 講演「再開館にせまる！設備改修の概要」

はじめに県博の角田学芸員より、設備改修の概要についてお話しいただいた。当初は改修した空調機器を中心にバックヤードを見学する予定であったが、参加者が想定以上の人数となったため、講演と館内見学に変更されたという。再開館に寄せる参加者の関心の高さがうかがえる。

講演では、改修に至った経緯やスケジュール、改修工事の内容等について写真で紹介しながら説明いただいた。中でも老朽化した空調機器の改修だけでなく、新たに収蔵スペースを増やすため、これまで物置等に使用していた複数の部屋に加湿除湿ユニットを設置してそれぞれ収蔵施設として使用可能にした点は、収蔵庫の狭隘問題を抱える多くの館にとって参考になる方法ではないだろうかと思う。一方で、数十年前の

機械が更新されるということは、本体機器がコンパクト化しその分スペースが広くなると想定されうるが、温湿度センサーの数を増やしたため、広さ的にはあまり変化はないとのことだった。また国の重要文化財の指定を受けているために壁に自由に穴を開けることができず、バックヤードにはダクトが張り巡らされているなどの意外性のある話も聞くことができた。

しかし、やはり参加者の関心を引いたのは、再開館における展示のリニューアルではないだろうか。県博側としては空調機器の改修目的で予算要求したため、改修費以外の予算は無いものの、約2年という長期にわたり休館することからリニューアルと認識されてしまい、展示に変化をつける必要が生じたという。再開館にあたって新しい県博をどれくらい見せられるかが鍵となり、来館者サービスの向上に重点に置くことにした結果として、正面エントランスにおける案内の見直しやデジタルサイネージの導入をはじめ、スマートフォンアプリによる多言語化対応、展示室の床や壁面の一部改修などを実施した。反省や課題もあるようだが、将来的な展示改修を考える良い機会になったとのことで、今後につながっていくように感じられた。

### 講演「つなぐ、神奈川県博展の開催意図と見どころ」

続いて、開催中の特別展「つなぐ、神奈川県博」の開催意図と見どころについて、展示を担当された千葉学芸員よりお話しいただいた。空調機器を改修したため他館の資料は借用できないことと、今年51周年を迎え館蔵品を改めて見直すという点から、本特別展は県博が所蔵する資料にこれまで関わってきた人々のつながりや、過去から未来へのつながりといった「つなぐ」をキーワードに、館蔵品資料を紹介する内容であるという。

通常の展示のように専門分野の学芸員が担当す



るのではなく、5人の若手学芸員が各自の専門分野から離れ、県博の一学芸員として資料を選定し解説を書くという、斬新で新しい試みといえよう。専門分野の常識にとらわれない視点で書かれた解説文の隣には、専門分野の学芸員が資料に対する思い入れやエピソードなどを語った解説文が並んでおり、一つの資料に対して異なる視点からの解説を楽しむことができるようになっている。人にはそれぞれ無限の見方があり、色々な目で見ると楽しさを感じてもらいたい、またそれが可能である県博の館蔵品の裾野の広さを伝えたいというのが千葉学芸員の言葉であり、再開館の記念にふさわしい特別展といえるのではないだろうか。

### 館内見学① 特別展「つなぐ、神奈川県博」

続いて館内見学に移った。自由見学であったため特別展から見学したが、講演の内容を思い出しながら見ると、神奈川県博の所蔵する資料の多様さに改めて驚かされた。

改修により自動ドアが設置された導入展示室に入ると、まず目に飛び込んでくるのが古墳時代の大きな家形埴輪である。これは昭和12年の発掘調査で横須賀市の蓼原古墳から出土したもので、昭和42年の県博の開館に合わせて収蔵された資料だ。他には、鮮やかな朱の布地に金糸の刺繍が目目を引く芝居衣装の内掛や、宮川香山（初代）作の真葛焼の水盤、さらにはスキー板も。一見何のつながりも無いように思えるが、これらの資料は「ようこそ、51周年の神奈川県博へ」というテーマのもと選び抜かれた資料である。

特別展は「ドームをつなぐ」「ひとをつなぐ」「空間をつなぐ」「研究をつなぐ」「チカラをつなぐ」「未来をつなぐ」という6つのテーマで構成される。壁面改修により黒で統一された展示室で資料を眺めていると、それぞれの資料に内包され



た時代や空間などを超えた多様な“つながり”、また県博の学芸員の資料に対する想いが感じられる展示であった。

### 施設見学② 来館者サービスと常設展

常設展示室は、リニューアルを視覚的に感じられるよう、カラーゾーニングが取り入れられていた。展示自体は大きな変化はないが、常設展の5つのテーマを5色に分類し、テーマごとに入口部分のカラーライトの柱やカーペット、キャプションなどの色が統一されていた。また、新たにスマートフォンアプリ「ポケット学芸員」を導入し、日本語および英語の解説に対応するようにした。解説の読み上げは県立高校の放送部に依頼したということで、実際に試したところ、ハキハキとした声で聞き取りやすく、解説を聞きながら展示をじっくりと見ることができた。外国語の対応は現時点では英語のみであるが、県内の博物館の中でも先進的な取り組みであり、今後のインバウンド対策も踏まえて中国語や韓国語などにも対応していくことが期待される。

### おわりに

今回の研修は、県博の再開館をテーマとした講演および施設見学の2本立てで、非常に有意義な時間であった。

館を運営していく以上、老朽化等による設備更新は不可欠であり、そのための休館も必要な対応である。一方で来館者側の立場に立てば「長期休館＝リニューアル」と感じるのも当然のことかもしれない。それゆえ県博が再開館に向けて実施した来館者サービスの充実に重点を置いた展示室の更新は、この問題をうまくクリアしていたように思う。課題も多いとのことであったが、低予算かつ限られた時間の中での様々な工夫も含め、参考にできる点が多く、また勉強になった。こういった事例は貴重であり、今後もこのような研修があれば有難いと思う。

最後に、本研修を企画された神奈川県博物館協会の幹事・事務局の皆様、ならびに貴重なお話をお聞かせいただいた神奈川県立歴史博物館の角田学芸員、千葉学芸員および神奈川県立歴史博物館の皆さまに感謝申し上げます。

(撮影 千葉 毅)

平成30年度 第2回研修会  
平成30年7月11日（水） 於：馬の博物館 参加者49名

## 「“みせる” 写真を撮る方法 in 馬博」参加記

シルク博物館 佐野 遊海

### はじめに

平成30年7月11日（水）、馬の博物館において、神奈川県博物館協会の平成30年度の第2回研修会が開催された。今回の研修会は「写真」がテーマに設定されており、プロのカメラマンを講師としてお招きし、静物写真の撮影技法について教えていただく機会となった。

### ポニーセンター見学および体験

写真撮影の講習に先立ち、参加者はまず馬の博物館の「生きた馬の展示部門」であるポニーセンターへ移動し、飼育展示されている馬にニンジンを与える体験、および乗馬を体験させていただいた。普段はあまり身近ではない馬という生物と実際にふれあうことができるこれらの体験は非常に貴重であり、馬がどのような特徴を持った生物であるのかについても間近で観察することができた。標本ではなく「生きている資料」を展示することの意義を感じた。

また、一般的によく知られた「サラブレッド」だけでなく、日本の在来馬を含めさまざまな品種の馬が飼育展示されており、それぞれの品種の産地や品種改良による特徴も目にする事ができた。

### 講習「プロと学芸員で考える写真の撮り方」

講習では、まず神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員である田口公則氏と、今回お招きしたプロカメラマンの中村淳氏がそれぞれ撮影した同一の資料の写真をスクリーンに並べて表示し、学芸員とプロカメラマンの写真にどのような差異が見られるかについて検証がおこなわれた。また、中村氏がそれぞれの資料を撮影する際に意識した点と、その理由についても解説していただいた。

ここでは、ただ単にカメラを構えて撮影するのではなく、どう表現するのか、何を見せたいのかということを考えて上で、資料の質感が伝わるように意識して撮影すること、それを叶えるために背景色やトリミングを工夫するなど、隅々まで気

を使うことが重要だということに気づかされた。

次に、講習会場に撮影機材を設置し、さまざまな分野にわたる資料を用いて中村氏に撮影の実演をしていただいた。用いた資料は、馬の祖先の復元模型や馬頭観音菩薩立像、書籍など形や大きさもさまざまなものであり、それぞれの資料ごと、また撮影した写真の用途ごとに照明やカメラのレンズ等の機材、撮影の角度を最適なものへ変更し、撮影した写真はその場で即座にスクリーンに映し出され、比較がおこなわれた。またその都度使用している機材について解説していただき、参加者からの質問にも答えをいただいた。

講習の中で非常に印象に残ったお話が、「1枚の写真を図録用、ポスター用、広報用・・・と加工して流用してもうまくいかない」ということだった。博物館の業務上で必要となる写真は、展覧会の図録に使用する資料写真や、イベントや講演会の広報写真、さらにはSNSで使用するための写真など、ひとくちに「写真」といっても多岐にわたる。用途ごとに写真の「何を見せたいか」という点が異なるため、当然それぞれ撮影方法も異なることになる。

例えば仏像を図録や報告書のために撮影する場合は、細部までしっかりと写すことが求められるため、影ができないような方法で撮影する。一方、ポスター等で使用するために撮影する場合、インパクトを持たせるためにあえて陰影をつける、というように、同じ対象物を撮影する場合であっても、それぞれの用途に合わせた写真を撮影しなければならないのだということを教えていただいた。

### 馬の博物館 展示見学

講習後には、馬の博物館の常設展および、開催中のテーマ展「馬の遊びと玩具」を見学させていただいた。馬と人との関りから生まれた文化や、馬を題材とした芸術品、馬と人が共に暮らした南部の曲屋、馬の進化の歴史など、「馬」というひとつのテーマを軸とした専門的な博物館として、

さまざまな切り口から馬に関わる資料を展示解説されており、同じく「シルク」というテーマを専門的に扱う博物館の職員として、馬の博物館の展示や取り組みは大変参考になった。

### おわりに

現在では、専門的な知識のない者でもカメラのオート機能を使用することで簡単に美しい写真を撮影することが可能であり、写真は誰でも撮りたい時に苦勞なく気軽に撮ることができるようになってきている。しかし博物館における業務の中で写真を撮影する際は、ただ漫然とシャッターを切るのではなく、「何のために」「どのような用途で」撮影するのかという目的をしっかりと意識し、それに即した撮影機材を用い、しかるべき方法で撮影しなければならないと知ることができた研修であった。

それは自分自身でカメラを構えて撮影する場合のみではなく、プロのカメラマンに撮影を依頼する際も同じことであり、学芸員がどのような写真を必要としているのか、できる限り多くの情報をカメラマンに伝えることで、よりイメージに近い写真を撮影してもらおうことができるのだということも改めて感じることができた。

今回の研修会では、カメラを持参している参加者も多く見受けられた。写真を撮影するというに関心のある学芸員が非常に多いのだという印象を受け、またそれだけ博物館における業務の中で写真の重要性が高いのだということを実感した。

大変有意義な研修会であったため、「写真」をテーマとした研修を今後も継続的に開催していただければ、さらに知識を深めていくことができるのではないかと。また、今回は静物の撮影について

の講習であったが、生物資料の撮影に関する研修もぜひ企画していただけないだろうか。動いているものを撮影する技術や、屋外等で二度と同じ条件で撮影することができない一瞬のチャンスで、少しでもより良い写真を撮影するための技術等を、ぜひ身に着けたい。

最後に、ご指導をいただいた講師の中村淳氏、またこの度の有意義な研修会を企画していただいた協会幹事ならびに事務局の皆様、そして馬の博物館の皆様に心よりお礼申し上げたい。



図1 ニンジンを与える体験をした北海道和種の「ゆき」



図2 中村淳氏による撮影実演

平成30年度 第3回研修会

平成30年10月5日（金） 於：大庭城址公園、藤沢市藤澤浮世絵館、藤沢市アートスペース 参加者26名

## 「史跡と文化施設の見学」参加記

相模原市立博物館 中川 真人

開発に伴って整備された藤沢市の史跡と文化施設の見学を目的とした研修会が、平成30年10月5日（金）に開催されました。近年、藤沢市辻堂駅前の再開発が進み、商業施設と行政機関の複合施設の中に整備された文化施設が藤沢市によって開設されました。また、昭和40年代の市街化による開発の中で失われつつあった大庭城址は、1985年に公園整備されていますが、発掘調査が本研修会の開催時期に行われていたこともあり、合わせて視察研修が計画されたものです。以下に雑駁ではありますが、研修会に参加して感じた点を中心に報告します。

### 大庭城址公園

大庭城址は中世に築かれた丘陵上の山城で、15世紀に太田道灌が本格的に築造し、その後は小田原北条氏が相模国を平定していくなかでさらに改修がされたという伝承をもつ中世の城です。大庭城址周辺は、昭和40年代以降の湘南ライフタウンによる市街化の開発によって、残念ながら城域の北1/3程が既に失われていますが、1985年には城址の歴史的な価値が損なわれないように「大庭城址公園」として整備され、市民の憩いの場として開放されています。本研修会では「史跡」と表されていますが、文化財の法律や条例に基づいて重点的に保護措置が図られた指定史跡で



図1 雨の中での宇都学芸員による大庭城址の説明

はなく、一般用語としての史跡になります。ただ、中世・神奈川の歴史を語る上でも重要な城址であることは間違いのないでしょう。

研修会での見学は、藤沢市郷土歴史課の宇都洋平学芸員による“熱”のこもったご案内をいただきました。当日は雨天のため、発掘調査現場の見学はできませんでしたが、公園内に見られる堀や土塁、曲輪（平場の空間）の配置など、わかりやすく解説いただきました。現況の地表面に残される土木遺構が公園内に取り込まれ、解説と合わせて築城当時の趣を感じることができました。

博物館的な視点で、私なりに感じた今回の大庭城址公園の研修ポイントは、単なる城址公園の見学ではなく、資料調査の重要性にあります。約40年前に行われた発掘調査成果が報告書未刊により、城址の本質的な価値が適切に評価されてこなかった課題に対し、長い年月を経て今年、報告書をまとめられた点にあります。宇都学芸員の“熱”のこもった解説は、過去の資料に真摯に向き合い、地域の歴史を語るべき史跡を評価し直したことに裏打ちされたものでした。どこの博物館でも様々な経緯を辿る資料があると思いますが、資料調査の重要性、それによる新たな価値づけによって、さらに博物館事業は展開できるものと感じることができました。実際、大庭城址については、報告書の刊行を契機として、企画展や記念講演会など、展示公開普及による事業を立て続けに打ち出しています。今後とも期待したいです。

### 藤沢市藤澤浮世絵館

辻堂駅前の再開発に伴い、商業・公共の複合施設が建設されました。その7階に開館した歴史系の文化施設が藤沢市藤澤浮世絵館です。同じ建物の6階には、次に見学する藤沢市アートスペースも開設されており、両施設合わせて文化芸術と歴史がコンパクトにうまくまとめられています。藤澤浮世絵館は郷土資料の展示施設の一環として、東海道藤沢宿や江の島の浮世絵に焦点を絞り、2016年に開館されています。館内は東海道



図2 藤沢市藤澤浮世絵館

五十三次、藤沢宿、江の島、企画展に分かれた展示スペースとなっています。他にも、交流コーナーとして、浮世絵資料などの解説が盛り込まれたタッチパネルや江戸時代の双六を拡大したテーブルなど、学びながら楽しめる工夫が施されています。

館内は藤沢市郷土歴史課の細井学芸員に解説いただきました。研修時の展示は「やじきたが来た！見た！食べた？ 藤沢・東海道の名所と名物」が開催されており、『東海道中栗毛弥次馬』の浮世絵資料を中心に、江戸時代に生まれた旅の名物キャラクター「弥次さん」「喜多さん」をうまくとり上げて、日本橋を起点に京都の三条大橋までの53の宿場の浮世絵が展示されていました。一枚一枚の個性あふれる浮世絵は、展示解説のパネルと合わせて、見るものを飽きさせることなく見ごたえのあるものでした。展示の解説文、キャプションは要点が絞られた短文で理解しやすい上、全て英語が併記されており、外国人来館者への対応も欠かさない細やかな配慮が印象的でした。資料を觀賞し、楽しく学べる展示の構成、見せ方は大変参考となりました。

### 藤沢市アートスペース

続いて同じ建物にある芸術文化施設への見学へと移りました。藤沢アートスペース（愛称FAS



図3 藤沢アートスペース

エファース）は2015年12月に開館しています。施設見学は、鎌田さつき学芸員ら皆さんにご案内いただきました。所謂美術館とは異なり、その事業展開が大変斬新で魅力的に感じました。

アートスペースは若手芸術家等の活動の場として、多様な創作活動に携わるアーティストたちに、制作と展示・発表の機会を提供する「アーティスト・イン・レジデンス・プログラム」と呼ばれる制作・展示プログラムが組みられています。全国から作品を募り、審査を経て入選アーティストを決定します。入選したアーティストは、アートスペースの「レジデンスルーム」で約3か月間の滞在制作を行い、展示を行うという仕組みです。創作活動する若手芸術家の育成と発表の機会を提供し、文化芸術を介して様々な輪が広がり、文化芸術のまちづくりを進める意欲的な取り組みでした。

以上、3か所の視察研修は、それぞれ内容は異なりますが、様々な事情を背景にもちながらも、着実に前へ進む藤沢市の文化芸術行政の取り組みを垣間見ることができました。

最後に、本研修会で講師を務めていただきました学芸員の皆様、企画運営していただきました協会役員の皆様に深く感謝申し上げます。

（撮影 藤井大地・田口公則）